



第40回総会記念講演

今は昔、病図協が若かった頃

首藤 佳子

I. はじめに

ただ今ご紹介いただきました首藤です。この度は近畿病院図書室協議会の設立40周年記念総会にお招きいただき、ありがとうございました。設立40周年、誠にありがとうございます。心からお祝い申し上げます。会の設立に携わった者の一人として、大変うれしく思いますとともに、もうあれから40年もの長い年月が経ったんだと、感慨ひとしおでございます。今日は記念講演ということでご依頼を受けましたが、私が退職しましてもう10年近くになり、病院図書室や情報環境の現状にはほとんど疎くなっております。何をお話ししたらよいか大変迷いましたが、そうだ、この機会に会の設立前後のことをお話しておこうと思いました。遠い昔のお話になりますが、お許してください。

II. 設立当時の時代背景

さて、お話に先立って設立当時の時代背景について、少し触れておきます。設立は1974年の秋、1960年代後半の学園紛争や浅間山荘事件などの一連の出来事がようやく収束して、騒然とした世情が少し落ち着きを取り戻した頃でした。給料などはまだまだ低くて、大卒の初任給は2万円そこそこでしたが、それでも社会は高度成長期を迎えて、上昇気流に乗ろうとする活気に満ちた熱い時代でした。また、当時はさまざまな技術革新が目覚しく、図書館周辺の機器類にも新しい技術を用いた新製品が次々に誕生し普

及していった時期でもあります。情報の世界では、情報量が飛躍的に増加して、当時の図書館情報学関係の雑誌論文冒頭には、情報の爆発とか情報の爆発的増加という言葉がもうほとんど枕詞といいますか、常套句のように使われていました。そういえば今、さかんに言われていますコピーライト、それからコンソーシアムなどについても事例が紹介され始め、コンピューター技術を使って、情報のデジタル化や情報提供サービスが革命的ともいえる変化を見せ始める時期でもありました。

III. インパクトがあったコンピューターの出現

設立当時の時代背景の中で、私たちの仕事にもっとも大きな影響を与えたのがコンピューターの出現です。今、皆さんが当たり前のように業務で使っておられるコンピューターは、1974年設立時にはまだ私たちの業務とはかけ離れた存在でした。よい機会ですから、ちょっと寄り道をしてコンピューターと病院図書室について簡単に触れておきます。

1950年代にコンピューター技術が開発され、1970年代にはパソコンが登場、1980年代に入ってから多くの図書館で業務にコンピューターが利用されるようになりました。その後、1980年代末から1990年代にかけてインターネットシステムが完成し、図書館業務にとって必須のツールとなっていくわけです。二次情報のみならず一次情報のデジタル化も急速に進み、通信技術の発達と相まって広く普及し現在に至っています。

コンピューターの恩恵がもっとも目覚まし

すとう よしこ：近畿病院図書室協議会初代事務局長・元
星ヶ丘厚生年金病院図書室

かったのは文献検索業務です。設立当初は、医学中央雑誌、Index Medicus、Excerpta Medica、Chemical Abstracts、Biological Abstracts、Current Contents など冊子体のツールを使ってマニュアル検索が行われておりました。ところが、1970年代半ばには機械検索が始まります。これは文献検索に多大な時間と労力を費やしていた私たち図書館員にとっては、まさにエポックメイキングな出来事でした。

海外医学文献検索でもっともよく利用されていた Index Medicus は、1960年代に MEDLARS、1970年代初めには MEDLINE とかたちを変え、日本でも1976年に JICST (現 JST) が、MEDLINE 実験オンライン情報サービス (JOIS-I) を開始しています。当初は国立がんセンター、日本鉄鋼協会、化学情報協会にトライアルの機器が設置されましたが、1978年には公衆電話回線によるサービスが開始され、広く使われるようになりました。1980年代から90年代にかけてCD-ROMでも提供された時期がありますが、1997年からはPubMedとして、全世界に向けて無料公開されているのは皆さんご存知の通りです。

待望の国内医学文献の機械検索とはいいますと、1980年に、漢字端末による JICST (現 JST) の国内医学文献ファイルのオンラインサービス (1996年インターネット経由 JOIS へ、現在は JDream サービスとして継続中) が開始されました。これは本当にうれしかったですね。医中誌が1992年CD-ROM化 (2000年から医中誌 Web) されるまでは、国内医学文献の機械検索といえば、この JICST (現 JST) の国内医学文献ファイルのオンライン検索でした。

したがって、医学図書館員にとって機械検索といえば、まずオンライン検索でした。オンライン検索時代はけっこう長かったですね。オンライン検索は代行検索 (利用者自身による検索ではなく図書館員やサーチャーによる検索)、コマンド検索 (コマンドを使って検索式を立てて行う検索)、従量課金制が主な特徴でした。代行検索は図書館員や図書館情報部門の存在意義を

高めましたが、検索者には従量課金制によるストレスもありました。もたもたしていると、あっという間に何千円もの検索料金がかかるわけですね。こうした検索者のストレスを、当時はタクシー・メーター・シンドロームなど呼んでいました。検索業務には利用者へのインタビューや検索式をたてる作業が必要で、こうした作業を通して私たちは医学知識や検索スキルが身につきましたし、考える力が鍛えられたように思います。また、利用者との親密なかかわりを通して、図書館員も確かに医療スタッフの一員なのだという自覚とといいますか、実感を持つことができたのです。病図協発足を担った私たちの世代は、こうしたツールやメディアの変化をまさに身をもって体験した、リアルタイムで体験した世代といえます。同世代の図書館員が集まると、この時代の話題で盛り上がるのですが、やはりそれだけ私たちにとってはインパクトが大きかったです。病図協の歴史と病院図書室へのコンピューターの浸透過程はちょうど軌を一にしていって、それだけに印象深いですね。

IV. 設立当時の病院図書室の実態

さて、本題に戻ります。設立当時の病院図書室とはいいますと、一部の病院図書室を除いてまだまだ未整備なところが多く、せいぜい整備途上という状態でした。施設や設備、人員の配置など、あらゆる面で図書館間の格差が非常に大きく、実態は千差万別でした。平均的な病院図書室でも蔵書規模は小さく、また担当者は兼務が多かったですね。兼務といいますが、本務は別にあって (たとえば医局秘書とか年度課の職員など)、圖書の管理は片手間にといった兼務の形態がもっとも多かったと思います。一部パート職員や非常勤職員もいましたが、今のような、派遣とか委託などはそういう発想といえますか、考え方自体がその当時はなかったですね。したがって、担当者はいずれの雇用形態であれ、病院の自前の職員でした。今のように雇用形態

が複雑で指揮系統が錯綜しているというようなことはありませんでした。業務は図書の管理が主で、作業はすべて手作業、種々の図書館サービスは行われていないところが多く、「本の番人」とか「書庫の番人」というような言われ方をしたこともあります。文献入手については、ほとんどの病院図書室は既存のネットワークの埒外にありましたから、医師は図書室を経由することなく、製薬会社のサービスに頼ったり、あるいは自分の出身大学の図書館などを利用することが多かったと思います。

V. 協議会設立の発端と動機

では近畿病院図書室協議会はどういう経過で設立されたのか。まず、そもそもの設立の発端とはいいますと、私が京都南病院の山室さんにおかけした一本の電話、ということがいえるでしょうか。

私は当時、入職後一年経つか経たないかの頃。「司書資格」は取得していましたが、病院図書館員としてはまったく使い物になりませんでした。初めてのショックは入職後間もない頃でした。リハビリテーション部の部長さんが訪ねて来られて、NASA（アメリカ航空宇宙局）のテクニカルレポートのコピーを取り寄せてほしいと頼まれたのです。確か、義肢装具に関する文献だったと思います。私はそのとき、何をどうしたらいいのか、本当にさっぱりわからなかった。相互貸借も文献検索も知らなかったのです。これが最初のつまづきで、その後次から次へと寄せられるリクエストにも右往左往するばかり、自分の力のなさを思い知らされました。今考えてみますと、当時の私の病院の医師たちが図書館員に求めたものは、図書の管理や整理というより、むしろレファレンスサービスだったのです。これでは仕事にならない、何とかしなくてはと焦る気持ちでお電話したのが、京都南病院の山室さんでした。この電話がきっかけとなって、それからしばらく経った初秋の頃、JR大阪駅の噴水前でそれまでまったく面識のなかった

5人の図書館員（京都南病院/山室さん、京都市立病院/重富さん、大阪厚生年金病院/岡田さん、北野病院/塩田さん、星ヶ丘厚生年金病院/首藤）が集まりました。そして、その場で、近隣の病院図書室に呼びかけて会を作りましょうということになったのです。5人のうち、山室、重富、私の3名が発起人となって、設立のための準備を進めていくことになりました。

設立の動機は、もう何ととっても病院図書館員としての知識やスキルを身につけたい、文献調達のルートを確保したいという、当時の私たちの差し迫った切実な思いでした。さらに、私たちは何に向かって努力したらいいのか、そもそもあるべき病院図書室の姿とはどういうものなのか、病院における図書室の位置づけをどのように考えたらいいのか、などの問題意識の共有が病図協設立の大きな原動力になりました。

VI. 設立総会まで

会の結成は決まりましたが、その一方で、設立準備作業を行うに先立って、既成の図書館団体に何とか病院図書室の居場所を見つけることができないか、再度確認といえますか、模索もしています。打診した団体は、日本医学図書館協会、日本図書館協会、専門図書館協議会、図書館問題研究会などです。一番身近な医図協は入会のハードルが高すぎましたし、残念ながら他の団体にもそうした場所を見つけることができませんでした。ありていに言えば、「お呼びじゃなかった」わけですね。この一連の動きの中で、私たちが痛感させられたのは図書館界においても、病院図書室の認知度がいかに低いかということでした。この結果、やはり自前の組織をつくりましょうということになったのです。また、これとは別に設立前後には関東の病院図書館にもコンタクトを取っています。聖路加、関東通信、佼成病院などです。東京では当面機関加盟の組織はできそうにないということで一緒に団体を結成することにはなりませんでしたが、近畿でこの会が設立されて約一年後に、関

東では個人加盟の病院図書室研究会（今の日本病院ライブラリー協会）が発足しています。

発足までには、趣意書の作成や送付（確か、大阪、京都の100床以上の病院に送ったと記憶しています）、会則案の作成など大忙しの毎日でした。組織結成などにまったく経験のない無知な者が取り組むのですから大変でした。この過程ではJMLA近畿の方に本当にお世話になりました。特に奈良医大の吉本瑞応さん（当時の近畿地区選出JMLA理事）にはもう組織結成のAからZまで、すべてを教わりました。その意味では吉本さんは病図協設立の陰の立役者ともいえる方です。機関加盟体制もこの過程で決まったと思います。JMLA近畿の方たちには設立後も数年に亘って研修会、目録作成など病図協のさまざまな事業にお力添えをいただきました。この支援がなかったら、初期の病図協活動は成り立たなかったといっても過言ではありません。ご恩は忘れられません。

協議会の設立総会は、5人の初顔合わせから、なんと2カ月後のことでした。超スピード結成、「思い立ったが吉日」とばかりに一気に呵成に事を進めています。うまくいかなかったら拙速の誇りを免れなかったところですが、逆にそうしたからこそ結成できたともいえます。あれこれ難しいことを考えていたらとてもできなかったでしょうし、結成に至るまでに心身ともに疲れ果てて、モチベーションも維持できなかったのではないかと思います。

VII. 会の活動が軌道に乗った要因

1974年11月に星ヶ丘厚生年金病院（現星ヶ丘医療センター）で設立総会を開催、当会は近畿病院図書室協議会という幟を立てた小さな船で船出しました。ほんの小さな波でも転覆しそうな小船でしたが、何とか沖に漕ぎ出せたのはいくつかの要因があります。

まず一つは、会の目的が単純明快で具体的だったことです。目的がはっきりしていたため、長期・短期の目標が立てやすくなり、必要度に

応じて各種事業の優先順位を決めることができました。事業計画を立てる際には、機関加盟という組織形態を生かした、会員に広くフィードバックできるものを原則としています。当初は研修と文献入手に主眼において研修会や各種目録作成などの事業を展開しましたが、その後、会員委託サービスセンターの設置や業務マニュアルの作成など、次々と多様な取り組みがなされました。「みんなで一つの大きな図書館をつくらう！」と意気込んでいたことがよくわかります。これがその時につくった業務マニュアル（『医学資料の整理と利用：病院図書室マニュアル』）です。日本の病院図書室業務の標準化を目指して、アメリカのマニュアル“Library Practice in Hospitals”を参考に、会員病院の若い図書館員たちが分担執筆してつくったものです。冒険でしたが、達成感がありました。それまでこうしたタイプの出版物がなかったせいもあってかなりよく売れたと聞いています。こうした活動を通して皆徐々に図書館員としての自信がついたように思います。先ほど病図協で2013年に出版された『看護研究者・医療研究者のための系統的文献検索概説』（諏訪敏幸著）を見せていただきましたが、今も脈々とそうした活動が続けられていることを大変うれしく思いました。おめでとうございます。

二つ目は、設立当初の幹事のコンビネーションがよかったこと、これは僥倖でした。普通、組織論といえばリーダー論が主流ですが、設立当時の病図協には特に突出した強力なリーダーがいたわけではありません。幹事それぞれに個性や持ち味があり、それが、当時に必要とするさまざまな仕事に合致してうまく機能した。お互いに補完しあい、学びあい、連携して仕事を進めることによって、信頼感や連帯感が育っていきました。人間一人の発想には限りがありますが、そこに誰かが新しくアイデアを盛り込めば、さまざまな可能性が広がってくる、このことを如実に実感させられました。

三番目に、何にもまして、幹事病院の管理者

の方々の強力な支援があったことが挙げられます。設立総会で京都市立病院院長の弓削先生から、「すべての病院が経営問題で氣息奄々としているときに、病院図書室の発展のための機関をつくらうという、フロンティアスピリットに敬意を表します」と祝辞をいただきましたが、この時代は管理者の方々にとってもご苦勞の多い時代でした。それでも私たちと一緒に夢を追いかけてくださったのだと思います。

初代会長は私の働いていた病院の院長中島佐一先生でした。包容力のある太っ腹な先生でしたね。まさか自分が病院図書館団体の会長になろうとは夢にも思っていられなかったと思います。なぜなら、設立総会に提案した会則案では、役員は会長職も事務局長職もなく、運営委員のみでした。それが総会の場でいきなり会長に推挙され、あれよあれよという間に会長になってしまわれた。びっくりされたと思います。それでも快く引き受けてくださって、病図協が軌道に乗るまで、病院内外で、陰に陽にさまざまな配慮をしてくださいました。生まれたての病図協を何とかきちんと育てなければと責任を感じておられたのでしょう。院内では、事務方や関係する先生方に、当面は全面的に助けてやれと声をかけてくださったようです。「会長は自分だけど、実際に頑張るのはあの子やから」とも言っておられたようで、しばらくの間、私には院内で「会長さん」という渾名がつけました(笑)。入職後、一年半にも満たない図書館員が機関加盟の団体の事務局長になったのですから、危なっかしくて仕方なかったんだろうと思います。

第二代会長の京都南病院の笹井外喜雄先生は協議会の理論的支柱のような方でした。会を運営する上で、病院図書室はどのような規模で、どのような機能を持つべきなのかを知っておくことは大事なことです。笹井先生は発足後間もない頃、'Library information services for small libraries.'という文献を訳して、会報で紹介していただきましたが、その後、'Canadian stand-

ards for hospital libraries.'も紹介してくださった。このカナダの文献の翻訳には思いがけず私もかかわることになりました。ある日、山室さんから文献のコピーが送られてきて、「これを訳出して、参考にしたらどうだろう、ちょっと目を通して笹井先生と話してみてね」と言われたのです。前回と違って、今回は翻訳に当たっていくつか検討したい点でもあるのかなと思って気軽に京都南病院に出かけました。ところが、院長室に通されるや否や、挨拶もそこそこに、「さあ、座って。始めからワンセンテンスずつ訳して行って」と。頼りの山室さんは「じゃ、よろしくお願いします」とか言って出て行ってしまわれた(笑)。私、もう逃げるに逃げられず、汗をかきかき、全文を訳しました。学生時代の、マン・ツー・マンの原書講読の演習を受けているようでした。それにしても、他の病院の新米図書館員のために、忙しい時間を数時間も割ってくださった。もう今ではちょっと考えられませんね。そういう時代でした。その他、住友病院の杉本先生や国立大阪病院(現大阪医療センター)院長の水川先生など多くの院長先生や図書委員長の方から惜しみない助力を得ました。今から考えますと、この当時の先生方は本当に本を、図書館を、図書館員を、大切にしてくださいましたのだと改めて感謝の気持ちでいっぱいになります。また、総会の会計報告案について、その不備を指摘し、電話で長時間レクチャーしてくださった会員病院の事務長さんもいらっしゃいました。このように病図協は図書館員のみならず、病院管理者や事務方が一緒になってつくった団体なのです。

四つ目は、何とか初期の財政難を乗り切ったことです。年会費2千円でしたから、初年度の全財産4~5万円。これで一年間を乗り切らなくてはいけないのです。会費を低く設定して会員増を図りたいという思いと、早く事業を展開したいという思いの、二律背反状態が数年間続きました。ところが、お金もないのに、活動を控えようなどとは誰も考えなかったようです。矢

継ぎ早に事業を展開しています。不思議です。会員病院利用者のニーズ調査などの各種調査活動、会員拡大のための案内状送付、目録作成、あろうことか研修会記録の小冊子（吉本瑞応著『医学研究と文献検索』）までつくっている。また、記念講演や研修会の講師には著名な方をお招きしています。何と、あの日野原重明先生や森耕一先生（当時京都大学教育学部教授）にもお願いしているのですが、どんな風にやり繰りしたのか、今思うと「Oh magic!」ですね。財政立て直しの努力もしてはいるのですが、焼け石に水でした。結局、郵送費や資料作成費は幹事病院に助けていただき、寄付やカンパで急場を乗り切りました。そういえば、講師の先生方に謝礼をお渡しする、一旦受け取られた後すぐに、「じゃ、これは私からのカンパです」と言ってお返しになる、それをまた厚顔無恥にも「ありがとうございます」と受け取るような（笑）ことも、一度ならずありました。ある研修会の時など、あまりの薄謝に、会場となった病院の院長先生が呆れ果てて、急速ポケットマネーで食事を用意して、講師の先生をもてなしてくださったというようなこともありました。

初めて目録をつくったときなどもうれしくてうれしくて、津田良成先生（当時慶応義塾大学図書館情報学教授）に6冊もお送りして、お返しに先生から2万円もの寄付をいただいています（笑）。なぜ6冊も送ったのか（笑）、なぜ6冊という中途半端な数なのか、いくら考えても思い出せません。こんな風に数年間、もう凌いで凌いで、土俵を残しています。とても正しい組織運営とはいえませんが、「ボロは着ても心は錦」、意気だけは盛んでした。財政難はその後、数度に亘る会費改正でようやく正常化しました。

VIII. 組織・活動形態の再考

ところで、皆さんは病図協は当初からこの形のままで推移してきたと考えておられるかもしれませんが、実はこれまでに二度、それも設立

初期に組織の在り方を再考したことがあります。一つはJMLAへの団体加盟およびJMLA近畿との提携に関して、もう一つが日本病院会図書室部会への役員派遣に関してです。

JMLAへの団体加入問題は、設立の数年後、JMLA第51回総会において、「病院図書室を含むネットワークの形成を推進する」ことが決議されたことに端を発します。これを受けて、協議会では管理者と担当者による専門委員会を設置して、会員にアンケート調査を行うなどいろいろと検討を重ねました。その結果、「病図協はまだ運営基盤も弱く、また蔵書量にも限りがある」ということで、病図協としてJMLAに団体加盟させてもらおうということになり、JMLAに要望書を提出したのです。残念ながら、この要望はJMLA理事会の承認を得ることができず、実現には至りませんでした。しかし、こうした気運の中で病院図書室に対する認識が深まり、全国各地で大学と病院図書館間の連携、病院図書室のネットワーク形成の動きが活発になってきました。病図協でも、中四国や中部地区などで研修会を開催して、地域のネットワーク形成のお手伝いをしています。

その後数年経って、今度はJMLA近畿から当協議会へ、活動提携を結ぼうと提案がありました。この時も病図協では臨時幹事会が召集されるなどの慌しい動きがありましたが、連携の形やその内容、手続きなど基本的な部分で双方にかなり大きな考え方の隔りがありました。最終的な話し合いの会議が京大で開かれることになり、当時の事務局長の小田中徹也さんと私が出席しました。前日に院長室に呼ばれまして（当時の会長は星ヶ丘厚生年金病院の梅垣先生でした）、「明日はしっかり頑張ってください。もし、話が紛糾するようであれば、私が出かけていく。公用車も運転手も待機させておくから電話してくるように」と言われました。何か重要な外交使命を帯びて交渉に臨むという感じで緊張したことを思い出します。この件は最後まで双方の意見の調整がつかず、残念ながら合意には至り

ませんでした。つまり交渉は不調に終わったわけですが、JMLA 近畿の方たちも病図協の意向を受け入れてくださって、双方に変なわだかまりを残すことなく、その後も良好な関係を続けることができたのは幸いでした。小田中さんがこのデリケートな問題を大変うまく処理して下さったおかげです。偉大な事務局長でした。

もう一つ、その頃、日本病院会では病院図書室研究会のメンバーが中心になって、「病院図書室部会」が発足し、「全国図書室研究会」という研修会を年1回開催しておりました。病図協もこの趣旨に賛同して、隔年で関西で行われる研究会の時には、その企画立案や運営に協力してきました。数年経ってから、「図書室部会」に病図協から役員を出してほしいとの要請を受けました。研究会開催のためだけなら、役員は出さず、従来通り事務局がお受けして窓口を一本化した方がよいということになりましたが、この時には併せて病院会の「図書室部会」が全国的な病院図書室のネットワーク形成の場となりうるか、その可能性についても踏み込んだ議論をしています。しかし、組織上の問題もあって、最終的にはお断りすることになりました。こうした中央団体の本部は東京に置かれることが多いため、帰属意識といいますか、そういう面でも関東と関西では少し温度差があったように思います。歴史に“if”はないと言われますが、あのとき JMLA に団体加盟が許可されていたら、日本病院会に積極的に関与していたら、病図協はどんな形になったろうとふと思うことがあります。病院会の「図書室部会」はその後廃止され、JMLA では大学と病院の格差がなくなって、もう 40 機関くらいの病院図書室が会員になっているようです。時代の移り変わりに感慨深いものがあります。

IX. 心に残る先輩女性図書館員

さて、当時の私にとっては、仰ぎ見るような図書館員の方がたくさんいらっしゃいました。病院図書館員には女性が多いので、その中から

今も私の心に残っている数人の先輩女性図書館員を紹介します。紹介する方々は当時 40 歳代くらいでしたが、それにしても、皆さん風格がありました。

まず朴木貞子さん（元北野病院図書館）、朴木さんには病院図書室のあり方全般を教えていただきました。小さな図書館でも各分野のベーシックなテキストブックとレビュー誌、レファレンスツールがあれば、大威張りでライブラリーの旗を掲げなさいと。その言葉は私の病院図書館員としての支えになりました。何度かお家に招かれてお話を伺う機会がありましたが、ライブラリアンシップを叩き込まれたような気がします。職業人としての倫理、継続学習や研究の大切さ、現状に甘んじないで未来を切り開いていく姿勢など、本当に多くを学びました。

山室真知子さん（元京都南病院図書室）、病図協発起人のお一人です。山室さんは、日本における病院の患者図書サービスの草分け的存在です。京都南病院図書室には病図協設立当時すでに一般書の書棚がありました。今でこそ患者さんへの情報サービス・図書サービスは広く知られていますが、当時は取り組んでいるところはほとんどなかった。私は山室さんのおかげで、非常に早い時期から患者サービスについて知識を得ることができましたし、自分の病院に持ち帰って検討することもできました。今、星ヶ丘では、従来の医療スタッフ用の病院図書室のほかに、枚方市立中央図書館による病院サービス、NPO 法人医療の質研究会の患者図書館サービスの、3つの図書館サービスが行われています。これも、元を辿れば山室さんのおかげだといえます。

この朴木さんと山室さんにはもう一つ驚いたことがあります。初めて朴木さんのお宅にお電話した時、電話口に出られた女性が、「はい、三井です」とおっしゃった。私、すごく慌てて「すみません。私、朴木さんという方にお電話したのですけど、失礼しました」って切ろうとしたら、「私が朴木です。朴木はライブラリアン

ネームです」とおっしゃるんですね。芸名やペンネームは知っていましたが、ライブラリアンネームというものがあることを初めて知りました。その直後、山室さんに報告の電話を差し上げたところ、今度は「はい、宮田です」と(笑)。なんと山室さんもライブラリアンネームだったのです。今では職業上、旧姓を使う女性は決して少なくありませんが、当時は珍しかったのです。一晩のうちに立て続けに私それを経験しまして、本当に心の底からショックを受けました(笑)。

それから、設立時の幹事だった山口タツ子さん(元大阪通信病院図書室)、この方はあまり表には出て来られませんでしたが、初期の病図協を陰で支えてくださった功労者です。小柄で飄々とした方ですが、実はモノに動じない病図協の肝っ玉母さんのような存在でした。当時は管理者を交えた会合がよく開かれましたが、立場が違えば意見も違います。私、会合の席で他の病院の偉い先生に向かってついつい生意気な口を開くことがありました。そんな時、「もうそのくらいにしとき」って感じで隣に座る山口さんからクッと洋服の袖を引っ張られました。机の下で足を軽く蹴られたこともあります。懐かしいですね。初めての目録作成では、欧文編は版下すべてを山口さんが英文タイプで作成してくださいました。山口さんにもびっくりしたことがあります。病図協の用事で、大阪通信病院(現NTT西日本病院)をお訪ねした時のこと、何と山口さん、着物姿で仕事しておられたのです(笑)。確かに当時は牧歌的な時代ではありましたが、私、着物姿で仕事をしている病院職員を見たのは初めてでした。「寒いときには着物の方が暖かいんやわ」と。まあ確かに、とは思いましたけれど。

樺島範さん(元関西医大図書館)も心に残るお一人です。数少ない女性管理職の方で、JMLA近畿地区例会の紅一点でした。病図協初期に研修会その他で本当に親身にお世話してくださいました。関西医大で開かれたマニュアル

検索のワークショップでは、初めて医学文献の索引の仕組みをよく知ることができ、感激しました。また、病図協で初めて目録を作成した時には自館の職員を派遣して助けてくださった。仕事でよく関西医大をお訪ねしましたが、いつも「よう越し〜」と迎えてくださって、おいしい茶菓をふるまってください。人情に篤い、古きよき浪花の女人の風情を色濃く残された方でした。

次に本田品子さん(元国立がんセンター図書館)。著名なライブラリアンで、本も出しておられます。JOIS-Iが国内で初めて国立がんセンターに導入された時のこと、ある日突然、本田さんからお電話をいただき、「JOIS-Iの特定回線入れたからちょっと見においで」とお誘いを受けました。私、はるばる東京は築地まで出かけました。初めて見る機械検索、プリントアウトされる文献リストに、本当に目を見張りました。本田さんから使い方を教えていただいた、それが私の文献機械検索の事始めです。本田さんにもびっくりしたことがあります。「せっかく来たんだから築地らしいところ連れて行ってあげよう」と、場外市場で天ぷらをご馳走になりましたが、その席で、本田さんが「私は青雲の志を抱いて東京に来ました」っておっしゃった。女性から「青雲の志を持って」という言葉を聞いたのは初めてで、病院図書館員というのはそんな志を持った女性を選ぶ仕事なのかと、大変印象に残っています。

次の方、この方は直接病院図書室とは関係ありませんし、お名前も所属も失念してしまいましたが、確か、関東の大学図書館員だと思っています。朴木さんに連れられて初めて図書館研究会・日本図書館研究大会に参加した時のことです。この方が発表された後、確か、標目の取り方だったのでしょうか、厳しい批判、激しい意見の応酬がありました。私、どうなることかとハラハラしながら見ておりましたら、その方がずっと背筋を伸ばして「私、キャタローガー(Cataloguer)でございます」と言われた。まる

で、「この葵のご紋が目に入らぬか」という感じでした。隣の朴木さんは、「彼女、なかなかやるわね」と、ちょっと嬉しそうでしたが、私、その意味がよくわかりませんでした。私も当時カード目録をつくってはいましたが、自分のしていることが実はどういう作業なのか、どういう意味があるのか、よく理解しないまま目録を作っていたんですね。だからキャタローガー、目録作成者って、そんなに偉いものなのかと不思議でした。後日、目録作成の意味がよくわかるようになって、ようやくその方の言わんとしたことが腑に落ちるようになりました。その方の毅然とした姿、言葉は長い年月を経た今も心に残っています。

今ご紹介した先輩方には仕事に対する誇りを持ち、図書館を愛し、後輩を育てようとする熱い気持がありました。私はこうした先輩の背中を追いかけてながら仕事をしてきたように思います。皆さんもよい先輩に巡り合うといいですね。当時とは時代も環境も違いますが、何かの参考になれば幸いです。

以上、病協協発足前後の様子をごく一部ではありますが、お話ししました。体験はすべて時間とともに成熟していくものと言われますが、体験している間は無我夢中で意識的な余裕がありません。体験の意味が真にわかるのは、時を隔てて自分の中でその体験が反芻され、熟成してからです。今回こうして、当時のことを振り返る機会を与えてくださったことを感謝しております。

X. 今、オールドライブラリアンが思うこと

最後にオールドライブラリアンの思いを少し述べます。40年もの長い年月には社会の大きな変化がありました。情報デジタル化や通信技術の進歩、図書館業務のビジネス化により、図書館をめぐる環境が大きく変わりました。また、雇用形態の変化によって、労働環境も変わった。図書館が一つの独立した機関としてあるのではなく、人も資料もパッチワークのような、モザ

イクのかけらで成り立っている寄り合い所帯のような感じになってきた。利便性や効率性の陰で、図書館員が利用者や資料と親密なかかわり合いを持つことが少なくなってきたとも感じています。直に触れることによって生まれる生き生きとした実感や確かな手触りが薄れていくことは大変残念なことと思っています。今や、世をあげてのIT社会。インターネットは、個人の暮らしや社会を根本で支えるメディアになってきつつありますが、その恩恵は十分に認めるものの、まだ、その安定性や流通する情報の質などには検証が必要です。たとえば、電子ジャーナルはコンソーシアム契約やビッグディールで利用が普及した反面、アーカイブ権や図書館の資料選択権、費用対効果などについてはまだ検討が必要なのではないでしょうか。また、情報のデジタル化によって、資料が「モノ」としての実体を失い、情報が一極集中、画一化しやすくなった。何もかもがあなた任せになっている心もとなさを感じています。しかし、もはやその流れはとどめようがありません。こうなった以上、その功罪を十分に知り、上手く活用することが大切です。一方、図書館機能を持続可能なものにするためには、何といってもやはり「ヒト」が一番重要なファクターだと思います。今の図書館員には以前よりも情報マネジメントや情報コーディネーターとしての役割、それから批評的な知識といいますか、クリティカルな資質など、より高い見識が求められるのではないかと思います。昨今のように、そのための人材が安定しない条件のもとに置かれるのは、モチベーションや権限の点でとても残念なことです。何もかもが不安定で先行きの見通しが立ちにくい時代になりました。このような社会で、図書館は生き残れるのか、そして病院図書室はどうなっていくのか、ちょっと心配です。図書館員としての腕力を磨き、主体性を持って、賢く、慎重に対処してください。医療の現場に最新の知見や質のよい医学医療情報が必要なことは、昔も今も変わりありません。

時代に即した新しい病院図書室像をぜひ模索していただきたい、期待しています。

聞くところによりますと、企業図書館は、1970年代半ばをピークにその数が半分以下に減少しているといえます。種々の図書館団体も、会員数の減少などで運営が厳しくなっているという嘆きをよく耳にするようになりました。図書館という場、あるいは職能団体としての場が淘汰されつつあるのかと心配です。今まで当然のことと考えられてきたこれらの存在意義が改めて問われる時代になってきたのかもしれませんが、しかし、こうした「場」は、いったん失ってし

まうと、リカバリーは本当に至難の業です。幸いなことに、病図協はこうして無事に40周年を迎えることができました。40年前船出した小さな船は、今ではすっかり大きな船になりました。本当に皆様のご努力の賜物です。ありがとうございます。どうかこれからも大切に守ってください。40周年の港で鋭気を養って、さあ、また新たな航海が始まります。若い力に期待して、病図協OB皆と共に一路平安を祈ります。

Bon Voyage! 実り多い、よい船旅になりますように。